

## 心の平和

中沢中学校 福澤 彩花

「あなたのひいおじいちゃんね、まだ若い頃に徴兵されて戦争に行くことになったの。だけど出発前に終戦しちゃってね、結局帰って来たんだって。」

嬉しい知らせなのだと思った。もう会えないと思っていた人が、生きて帰って来たのだから。しかし、続く母の言葉に、私は恐怖を覚えた。

「でも、『戦争に行って生きて帰って来るなんて、それで国に貢献したと言えるのか』って、冷たい目で見られたらしいよ。」

息が止まる程の、衝撃。

今まで教科書の中でしか知らなかった遠い過去の世界を、一気に身近に感じた瞬間だった。

戦争、と聞いて私が思い浮かべるのは、空襲や原子爆弾、そして沖縄の地上戦だ。無数の焼夷弾によって沢山の人々が犠牲になったり、住み慣れた町が一瞬にして奪い去られたりした。民間人も地上戦に巻き込まれ、集団自決に追い込まれた人々もいたという。これらは、認識されている被害の一部だ。その現状を受けて、戦後、様々な条約が結ばれ、日本は戦争に関わらない中立的な立場になった。土地が焼かれることも、家族や友人を失うこともない。事実上平和になったといえるだろう。しかし、争いがなくなる事と人々の心の平和は、別物のような気がしてならない。一度受けた傷、それも、心に関わるものは、自分の中に残りやすいからだ。それで、本当に平和になったと言えるのだろうか。

では、平和とは何だろう。戦争がなければ。誰もが平等なら。それもそうだが、心の平和を失ったら、再び同じ過ちを繰り返してしまうかもしれない。そのことから、私は、過去から学び、心からよい国際関係を築き上げていくことこそが、平和への近道だと思っている。そのために、見えるものだけでなく、心という見えないものにも目を向ける。それが、これから様々なことを学んでいくうえで大切な基礎だと強く感

じる。

私の曾祖父は、戦後、「空を飛んでいる飛行機が怖い」と言っていたそうだ。戦争にまつわるもの全てが恐ろしく感じたのだろう。戦争によって手足を失った人が差別されることもあったかもしれない。数々の偏見と戦う人生を歩んだことが容易に想像できる。投げかけられる言葉や視線に、居心地の悪さを感じていたはずだ。これもひとつの戦争であるといえる。しかし、そんなとき、誰かの存在が、誰かの言葉が、少しでも心の支えになれば、再び明るい未来へと歩んで行けるのではないか。心の平和を手に入れることができるのではないか。

曾祖父が、生存をけなされて、どのような思いで毎日を過ごしたのかは分からない。ただ一つ確かなのは、困難な状況でも自分の人生を諦めることはしなかったということだ。それはきっと、家族という心の支えと、庭師になりたいという強い意志があったからだ。その証拠に、今、私はこの日本で生きていて、曾祖父からの植物を愛する気持ちを受け継いでいる。しかし、世界に目を向けると、少し前までロシアとウクライナの戦争がとても話題になっており、人々は今もその被害に苦しんでいる。直接見て、会って話を聞いたわけではないが、現地での苦労は肉体的にも、また、精神的にも底知れないもののはずだ。

見える被害だけではない。見えない被害についても知識を身に付け、救い寄り添い、それを後世に伝えていくこと。それが次世代を担う私達の大切な使命であると考えている。